

心の距離が近付いた喜びを実感

十二期生の保坂君が社長を務める「ホテル一柳」で開催された新年例会は、諸君と私の心の距離を大幅に縮めたような気がしています。まことにうれしいことです。諸君との心の距離が縮まると、諸君へのいとしさが急速に増してきます。これまた、まことにうれしいことではありませんか。諸君は、いかがでしょうか？

今年度から、私は、『夢甲斐塾』の最高責任者としての役割を、新しく設けた役職の「塾頭」に譲ることを決め、入倉 要さんをその職に任命しました。それが、結果的に、諸君と私の間に、微妙な心の距離を生んでしまっていたようです。私自身が、「一步引いた形」を意識したために、諸君との精神的な距離感をつくっていたようです。

うれしかった感謝の冊子

新年例会が、一晩泊まりの趣向だったことも、打ち解けた雰囲気醸し出してくれました。また、短い時間ではありましたが、諸君の一人一人と話をすることができたことも、親近感を増しました。中でも、うれしかったのは、私が毎月お送りしているこの手紙とデイリーメッセージに対して、全員の感謝の言葉をまとめた冊子をプレゼントしてもらったことと、普段参加していない人が出席してくれていたことです。

私は、この二ヶ月、諸君への手紙とデイリーメッセージを送っていませんでした。「一步引いた」という意識から、もう、送るのを止めようかと逡巡していたのです。それだけではありません。送り始めて以来、諸君の誰からも、「受け取った」といった反応がなく、「糠に釘」、「のれんに腕押し」のような頼りなさを感じて、つつい出す意欲を失ってしまっていたようです。もちろん、私が出さなくても、諸君の誰からも、何の反応もありませんでしたから、止めても誰も気が付いていないのだろうと勝手に思い込んでいました。

それが間違いだったことを、今回の新年例会で、教えられました。諸君からの感謝の意を込めた冊子をプレゼントされた時には、瞬間、「しまった」と思いました。安易に止めていたことを猛反省しました。そして、あわてて、翌日の今日、この手紙を書いている始末です。

見返りを求めない姿勢を確認

いつも、「人のためにと思って物事をする時には、見返りを求めてはいけない」と言ってきました。その私が、いつの間にか、見返り、代償を求めていたのです。「の」が付くと、愚痴が出る」と言われます。「こんなにしてあげたのに」、「せっかく良かれと思ってやってあげたのに」などと言うと、必ずその後、「礼状の一つも来ない」、「お礼に言葉の一つもない」と愚痴が出るのです。それでは、好意が好意ではなくなります。これから、再び、手紙を出します。デイリーメッセージも送ります。